

調査報告

イタリア・サルデーニャ紀行

—グラムシの家博物館を訪ねて—

尾場瀬 一郎*

本稿はイタリア・サルデーニャ島ギラルツァにある「グラムシの家博物館」を三度にわたって訪れた際の報告である。グラムシは1891年にサルデーニャ島のアーレスで生まれてから、高校を卒業しイタリア本土のトリノ大学に入学するまで、46年の生涯のうち20年間はサルデーニャ島で過ごした。サルデーニャ島の文化的個性や地政学的背景が、彼の生涯や思想に与えた影響は小さくないはずだ。筆者は、グラムシの生家のあるアーレス、グラムシの家博物館があるギラルツァ、それから彼が高校時代を過ごしたキャリアを訪れた。とくにギラルツァでは、地元出身のグラムシの家のガイドに対して、グラムシを育んだサルデーニャ島・ギラルツァの町の風土や歴史、当地におけるグラムシの親族の存否についてインタビューを試みた。

キーワード：アントニオ・グラムシ、グラムシの家博物館、イタリア、サルデーニャ島、ギラルツァ

目次

はじめに

1. サルデーニャ島へ
2. グラムシの家博物館にて (1)
3. グラムシの家博物館にて (2)
4. 三度目のギラルツァ訪問
5. グラムシ家の人々
6. アーレスのグラムシの生家
7. 州都キャリアへ
8. サルデーニャ・多文化主義の島
おわりに

はじめに

“小旅行記”とでもいうべき以下の報告は、三回にわたるサルデーニャ島ギラルツァの「グ

ラムシの家博物館」(Casa Museo di Antonio Gramsci) 訪問が基礎になっている。第一回目は2009年11月18日から11月26日まで、第二回目は2011年11月1日から11月14日まで、第三回目は2012年3月18日から3月26日まで、筆者はイタリア・ローマおよびサルデーニャ島に滞在した。

イタリア訪問の目的は、かねてからわたしが研究対象としてきたサルデーニャ島出身の思想家アントニオ・グラムシの生涯の一端を追体験しつつ、彼の思想や行動がどのような点でサルデーニャ島の文化的個性によって育まれたのか、自分の目で確かめてみることにあった。もちろん、グラムシが幼少期を過ごしたころの島の風土や社会状況と現在のそれとは、まったく異なっているだろう。また、サルデーニャ島の文化や歴史と彼の思想とを短絡させることはきわめて安易な考えだろう。それはよく

*立命館大学非常勤講師

わかっているつもりだったが、わたしはサルデーニャ島の“空気”だけでも触れてみたかったのだ¹⁾。

そもそも今回の報告作成を思いついたのは、嶋田豊著『グラムシへの旅』（1980年）に触発されたためである²⁾。わたしは大学生のころ『グラムシへの旅』を読んで以来、いつかサルデーニャ島を訪れてみたいという気持ちをいだいてきた。

日本において『グラムシへの旅』以降、「グラムシの家博物館」に関する報告、それから実際にサルデーニャ島を訪れ、グラムシ所縁の地を巡った報告は皆無とあってよい。そういった意味で、本書はこれまで日本のグラムシ研究において重要な資料でありつづけ、現地報告として先駆的な意義をもっていた。ただ、非常に残念なことに、同書ではグラムシに関する記述にあまり頁が割かれてはいない。また、サルデーニャ島に関する報告も通り一辺倒の印象を受ける。大学生のときに読んだ後も、それ以降何度か読みなおしてみても、わたしは物足りなさを感じた。

グラムシは、1891年にサルデーニャ島・アーレスに生まれてから高校卒業の20歳まで、つまり1911年までサルデーニャ島で暮した。彼は実に、46年の人生の約半分をサルデーニャで過ごしたのである。そういった意味では、グラムシの人格形成の大半は、サルデーニャ期に属するといっても過言ではないだろう。

また、グラムシは出島の約20年後に、獄中から義姉タチアーナに向けて「私は『サルデーニャの』私の殻にまた閉じこもることにします」と書き送っている³⁾。グラムシの伝記作家・フィオーリはこの点に関して、グラムシは出獄後「サルデーニャに帰って、絶対孤独の生活を守

ろうと思っていた」と説明を加えている⁴⁾。グラムシは晩年まで、故郷サルデーニャを想いつづけたのだ。サルデーニャの文化的個性や地政学的背景を理解することなしに、グラムシの生涯や思想を理解することはできないだろう。

本レポートでは、嶋田氏の『グラムシへの旅』では薄かった、サルデーニャ島とグラムシに関する記述を中心にした。そういった意味では、本稿は嶋田豊氏の高著を事後的に補うものでしかない。同氏のサルデーニャ訪問と私のそれとの間には約30年の歳月が横たわっており、真の意味では補足になっていないかもしれないが、それもまたよいのではないだろうか。30年のギャップがあるからこそ見えてくることもあるはずだ。

1. サルデーニャ島へ

三回の訪伊のうち、いずれも到着後の二、三日はローマで一息ついて、その後にサルデーニャ島に移動した。一回目と二回目は船で、三回目は飛行機でサルデーニャに渡った。とくに最初に船を選んだのは、サルデーニャがどれくらい本土から離れているのか確かめなかったからだ。船旅では、本土とサルデーニャ島との距離が実感できるのがよい。また、これまで奄美や沖縄行にもしばしば船を利用してきたわたしには、船旅の方が気楽である。

サルデーニャ行きの船は、ローマの外港とでもいうべきチヴィタヴェッキア港から出る。ローマ・テルミニ駅からチヴィタヴェッキア駅までは普通電車で小一時間ほどかかる。チヴィタヴェッキアは一時期グラムシが獄に繋がれていた町だが、残念なことに、フェリーを利用した二度とも町を探索する時間的余裕がなかった。

船会社ティレニアのフェリーは1万5,000トンクラスの大型船である。わたしはいずれもシーズンオフのときに利用したからか、乗客は2、30人程度ときわめて少なかった。運賃は往復にすると安く、シーズンオフだと二等で80ユーロほど、一等で100ユーロ少々である（ちなみに飛行機は、往復運賃約180ユーロほど）。二等は、座席で夜を過ごすということになる。だが実際のところ、シーズンオフの二等室はガラ空きなので、一人で好きなだけ席を占拠することができる。一度目のサルデーニャ行のとき、わたしは座席を横一列使い、長々と寝そべることができた。二度目の訪問のときは、一等を利用した。一等は4人一部屋で、二段ベッドが二つ据えられていた。シャワーと洗面所も各部屋に備えつけてあった。

船は夕方6時ごろにチヴィタヴェッキア港を出る。サルデーニャの州都カリヤリへの入港は、それから約15時間後である（飛行機は所要時間1時間）。秋はティレニア海が荒れ、船が揺れると聞いていたが、一回目の訪問のときは“なき”でたいへん快適な船旅だった。

二度目に船でサルデーニャ島に渡ったときの“災難”も記しておきたい。二回目の船旅は、シロッコに翻弄された。シロッコとはアフリカの砂漠から吹いてくる季節風だ。シロッコが吹くと、その影響で海が荒れる。わたしは朝の天気予報でシロッコが吹いていることは知っていたので、ティレニア海が荒れるのは覚悟していた。船は揺れたが、よく眠れた。朝起きると、同室の若者がわたしに「船内アナウンスをよく聞け！」という。わたしが、アナウンスが早口でよくわからないというと、英語で説明してくれた。船は「シケのため最終目的地カリヤリまで行けない」、「途中のアルバタックス港で全員



サルデーニャ島地域概観図

降ろす」ということだった。

わたしはどのようなルートをとれば、島の東岸のアルバタックスから西岸寄りのオリスターノに行けるのか、まったくわからなかった。それほどの揺れではないにもかかわらず途中で客を降ろし、放置する船員の態度にわたしは少々腹がたった。あと数時間でカリヤリに入るはずだったのに、電車やバスを乗りついで目的地オリスターノにたどりつかなくてはならなくなってしまった。

サルデーニャでは、鉄道網は発達していない。鉄道はおもに西部の諸都市・町をつないでいるだけで、山が多い東部の鉄道網は、西部よりもさらに薄いようだ。電車は南部の州都カリヤリから中部の都市オリスターノを通り、北部最大の都市サッサリまで走る。カリヤリからサ

ッサリまで所要時間は約5時間。電車は“普通”しかないし、しばしば遅れる。本数もそれほど多くはなく、一時間に一本しか来ない時間帯もある。それを補うかのようにバス網が発達しているが、こちらも“接続”がわるく便利とはいえない。結局、アルバタックスからオリストアーノまで、直線距離で100キロ程度しかないのに、10時間以上かかった。

2. グラムシの家博物館にて (1)

はじめてギラルツァのグラムシの家を訪れたとき、昂った心で家の扉をたたいたが、中からは何の反応もなかった。次の日に期待したが、翌日も家は閉じていた。宿泊先のご主人の計らいで滞在の最終日に開けてもらうことができたが、内部をじっくり見ることはできなかった。結局、一回目のギラルツァ訪問は、家の外観等を写真に収めるだけで終わってしまった。後でわかったことだが、家は補修工事中だったようだ。

帰国後に目を通したグラムシの家のパンフレットには、次のように説明されていた。グラムシ一家がギラルツァに移ってきたのは1898年である。家は1965年にイタリア共産党（PCI）が取得した。80年代初頭、文化人や労働者、サルデーニャ島民の援助の下、修復工事が行われた。グラムシの家は“サルデーニャ中部に見られる典型的な家”である。展示物の充実、グラムシの姪、ディッディとミンマに負うところが大きい。

一度目のサルデーニャ訪問のとき、わたしはギラルツァの民宿（B&B）に泊まったが、二度目、三度目は、オリストアーノのホテルに宿泊した。オリストアーノはサルデーニャ中部の古都で、中部では最大の商業都市である。人口は3万人ほどだが、由緒ある古い教会等が町中に散在しており、見どころが多い観光地でもある。町中が祭り一色になる“サルティリア祭”がとりわけ有名で、祭のときには日本人観光客も多く訪れるという。グラムシの親戚もオリストアー



グラムシの家博物館（中央の白い壁の建物）



ピエーロ君

ノにいたようで、彼は『獄中からの手紙』のなかでオリスターノの町にたびたび言及している。

オリスターノからグラムシの家があるギラルツァへの直行バスはない。わたしはオリスターノからアッパザンタまで電車を利用した。所要時間は30分ほど。アッパザンタで降りたら、グラムシの家まで30分ほど歩かなくてはならない。

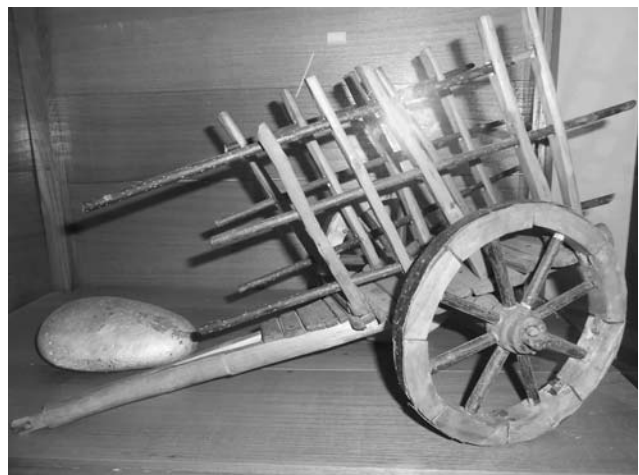
二度目のギラルツァ訪問のとき、グラムシの家で出迎えてくれたのはピエーロ・オニダ（Piero Onida）君である。彼は現在22歳。ボランティアでこしばらくグラムシの家のガイドをしているという。日本人はわたしで二人目だといった。わたしが簡単に自己紹介した後、ピエーロ君も自分のことを語りはじめた。彼はグラムシと同じギラルツァの出身（Ghilarzese）である。今はキャリア大学の学生で、政治学を専攻している。もちろん、グラムシを中心に研究している。そして、グラムシを郷土の誇りと思っている。とくに、厳しい人生を耐えぬいた点で彼を尊敬している。今日は日本からはるばる訪ねてきてくれてとてもうれしいと喜んでくれた。

ピエーロ君は年齢の割にはとても落ち着いているが、彼からは何か情熱的なものが伝わってくる。真面目だがユーモアがある、そういったタイプの青年である。わたしはすぐに彼を気に入った。

最初に、グラムシの家の“間取り”を説明しておきたい。部屋の構成をごく大ざっぱにいうと、5畳～6畳程度の部屋が一階に三部屋、二階にも三部屋ある。別に6畳程度の離れ（“パン焼き小屋”）があり、8

畳程度の裏庭もある。日本人のわたしたちの一般的な感覚からいうと、グラムシの家は“立派”だといえるだろう。嶋田氏は『『グラムシの家』は、二階建て四室ほどの小ぢんまりした家』だったと記しているが、このような判断は、グラムシは貧しかったはずだという思い込みによるものではないだろうか。ピエーロ君も、「グラムシの家庭は典型的な中産階級といえます。父親が逮捕されたから貧しくなっただけで、そもそも貧しかったわけではありませんよね」といった⁵⁾。そして、「この家はグラムシの母親ベッピーナが親族から譲りうけた家で、当時のギラルツァの他の家と比べると立派で大きな方ですよ」とつけ加えた。

グラムシの家のエントランスの右側の壁には、グラムシの顔写真が拡大されたポスターが貼られている。別の壁には小さなガラスケースが据え付けられており、その中にはグラムシが後の妻ジュリアにモスクワで贈ったプレゼント、「手押し車」（caretto）の小型模型が展示されている。これはグラムシの手作りである。手押し車の荷乗せの部分はさまざまな太さの木材



手押し車

で作られており、車輪や車軸はガッチリ組まれている。グラムシは手がたいへん器用だったことがわかる。

ピエーロ君は、「これは典型的なサルデーニヤの手押し車です」、「昔のサルデーニヤの子どもたちはこういうものを作って遊んでいたのです」と説明してくれた。そして、うち解けてきたのか彼は、「この手押し車を将来の妻ジュリアにプレゼントしたということには、二人でともに重荷を担っていかうという象徴的な意味があると思う」、「グラムシにとってジュリアとの出会いは、とても大きな意味をもっていたのです」と自説を展開しはじめた。

3. グラムシの家博物館にて (2)

もう少し詳しく部屋を見ていきたい。グラムシの家の一階の一室は、“居間”として使われていたようだ。大きなテーブル一台とイス数脚が置かれ、テーブルの上には訪問者用のノートやアルバム等が並べられている。壁には、グラムシが獄中からギラルツァの母親へ送った手紙が拡大され、プラスチック・ボードに転写されたものが掛けられている。ピエーロ君はボードを見ながら、全文を朗々と読み上げてくれた。そして、「ここには今の大統領ナポリターノやベルリングエルも来ましたし、グラムシの息子〔二男ジュリアーノか?〕も何度か訪ねてきました」と説明した。

“食堂”だったと思われるもう一つの部屋には井戸があり、グラムシの母ペッピーナは、ここから水を汲んで料理等に使っていたようだ。テ

ーブルの上にはさまざまなパンフレットや地域の催し物のチラシが置かれていた。なかにはサルデーニヤの民俗舞踊教室のチラシもあった。グラムシの家は今後、地域のコミュニティ・スペースを目指していくつもりようだ。

最後に案内された一階の部屋は、現在事務室として使われているようで、机の上にはパソコンが置かれ、本や資料、グラムシの家で売られているグッズ等が本棚のなかに並べられていた。ピエーロ君は普段、ここでホームページの更新などの仕事をしているといった。

二階の一室のガラスケースのなかには、グラムシが実際に使用していたメガネやバッグ、ダンテやピランデッロの本など彼の所持品が展示されている。他にグラムシの小学生時代の通知表なども見ることができる。すべて20点、オールAであった。それらのなかでもわたしの目を引いたものが、石のダンベルとコマである。石のダンベルは、身体の弱かったグラムシが、鍛練のために石を自ら加工して作ったものである。表面は少しゴツゴツしているがきれいな球形をした直径10センチほどの石が、ケースのな



石のダンベル

かに二つ並べられている。石のダンベルは、グラムシの強い意志がそのまま体现されているように見えた。

コマは木製、茶一色で引きしまった形をしている。「ケンカゴマ」といった感じだ。「サルデーニャの子どもたちはこのコマで遊びます」とピエーロ君が教えてくれた。グラムシは獄中で時おり、サルデーニャのコマを眺めていたのだろうか。二階のもう一つの部屋は“寝室”で、グラムシが少年時代に使っていた木製のベッドとタンス、手洗い用の洗面器が置かれていたが、どれもなかなかシックな感じのものだった。

二度目のギラルツァ訪問の際、わたしはピエーロ君のガイドから大きな感銘をうけた。彼は、グラムシを理解するためにはサルデーニャを知らなくてはならないというわたしの見解に、賛意を示してくれた。また、「サルデーニャなしにグラムシはありません。同じ意見の日本人に会って少しびっくりしました。ですが、グラムシを理解するためには、『ギラルツァ』を知らなくてはならないと思います」といった。

4. 三度目のギラルツァ訪問

二度目のギラルツァ訪問から帰ってきたわたしは、二度の訪問を小レポートにまとめたと思うようになった。ピエーロ君から教えてもらった情報を、文字化しなくてはならないという気持ちが日に日に強くなっていった。しかし実際に文字化していく過程で、材料不足を痛感させられた。書いていくうちに、次々と疑問が湧いてきた。これはメールでは

解決できないと考え、再度の訪伊を決意した。

三度目の訪問では質問事項を準備し、ICレコーダーをもってギラルツァに向かった。事前にピエーロ君にメールを出し、質問に答えてくれるようお願いしておいた。グラムシの家博物館に着くと、今回はピエーロ君ではなく、アレッサンドラ・マルキ (Alessandra Marchi) さんが出迎えてくれた。彼女は、「ピエーロはすぐに来るから」といって彼に電話してくれた。

ピエーロ君が来るまで、アレッサンドラさんとは話し話をした。彼女はギラルツァの隣町のアップザンタ出身で、キャリア大学で社会学や人類学を学んだそうだ。今はアラブの動向に関心を持っていて、近年のアラブ地域のダイナミックな動き（“アラブの春”）を理解するのに、グラムシの視点は非常に有効だと熱心に語ってくれた。目下オーバー・ドクターで、最近、ボランティアとしてグラムシの家のガイドをはじめたとのことだった。アレッサンドラさんの瞳は黒く澄んでいて、知的で冷静な印象を受けた。

ピエーロ君はまもなくやってきた。わたした



アレッサンドラさん



バザルトの町・ギラルツァ

ちはごく簡単に挨拶をすませ、早速ICレコーダーのスイッチを入れて、溜まっていた疑問をピエーロ君とアレッサンドラさんに投げかけていった。まず、ピエーロ君に“君は前回、グラムシという思想家はギラルツァとは切っても切り離せない、ギラルツァとグラムシの思想とは深いつながりがあるといったが、それはどういった点に見られるのか”聞いてみた。そして、“フィオーリはギラルツァの町を、閉じた「島のなかの島」といっていたが、そもそも閉鎖的な町からグラムシのような国際的な感覚をもった思想家が生まれるのか？”とつづけた。ピエーロ君とアレッサンドラさんは“いきなり難しい質問だ”という表情をしてお互いの顔を見合った。まずピエーロ君が、ゆっくり答えはじめた。

彼によると、ギラルツァはグラムシの時代も現在も、ギラルツァを中心にして半径30キロ圏内で最大の町である。グラムシの幼少時代、ギラルツァの人口は約2,000人で、今は約5,000人である。今日でも買い物をしたり、催し物に参加したりするため、周辺の町村の人々がギラル

ツァに集まる。かつてギラルツァには映画館も多数あり、映画を観るために人が方々から集まった。ピエーロ君は、「ギラルツァはある意味で、この地域の文化の中心でもあったわけです」と話をまとめようとした。だが、それだけでは同様の特徴をもった他の町との違いが説明できないことになる。

わたしはもっと異なった点から説明できないかと、“周囲との往来が盛んだということは、ギラルツァの産業と関係はないのか？”、“そもそも

もギラルツァの主な産業は何なのか？”聞いてみた。ピエーロ君は、「農業・牧畜が主であることはサルデーニャの他の町村と変わらない。ただ、ギラルツァ特有のものが一つあります。それはバザルト（basalto）です。これは、ギラルツァ特有の産業といえるでしょう」と自信あり気に答えた。

バザルト（玄武岩）はギラルツァ近辺で家を作るのに用いられてきた。グラムシの家の梁にも使用されている。ギラルツァはバザルトの産地に近く、これを切り出したり、加工したり、バザルトを素材として家を作ったりする労働力を必要とした。周囲の町村の人々は、仕事を求めてギラルツァにやってきた。以上のように、ピエーロ君は説明した。さまざまな意味で、ギラルツァはバザルトでできた町だといえそうだ。「バザルトは、ギラルツァに人を集めたのです」とアレッサンドラさんも話に入ってきた。

彼女は、次のように説明をつづけた。「ギラルツァはその上、かねてから州や県などの出先機関が多いところだ。病院やさまざまな施設

もある。町の外から人がたくさんやってきます。グラムシの兄ジェンナーロも登記所の職員をしていたし、グラムシも登記所でアルバイトをしていましたよね」。

わたしはこの点について、思い当たる節があった。かつてわたしはギラルツァの町を歩いていて、警察署が田舎町には不釣り合いほど大きいことに違和感をもったことがあった。また、ギラルツァの町の入口の標識に、さまざまな機関の名が記されているのを思い出した⁶⁾。

5. グラムシ家の人々

わたしはグラムシの親族の誰かがギラルツァに残っていないのかについても、質問してみた。グラムシは7人兄弟で、名前はそれぞれ、ジェンナーロ、グラツイエッタ、エンマ、アントニオ、マーリオ、テレジーナ、カルロである。もちろんみな亡くなっているが、その子どもたち、つまりグラムシの甥や姪がギラルツァに残っていないのか聞いてみた。

ピエーロ君が「テレジーナの家族は一部ギラルツァにいます」と答えた。彼によると、テレジーナには4人の子がいる。フランコ、ディッディ、ミンマ、マルコである。ミンマは2009年にギラルツァで亡くなった。フランコとマルコは他出して、そのどちらかはフィレンツェ在住ということであった。現在ギラルツァに住んでいるグラムシの親族は、テレジーナの娘ディッディのみということだ。

ちなみにテレジーナは、グラムシに似て知的で、グラムシがかわいがった妹である。ディッディはテレジーナの次女になる。グラムシは手紙の中でも「ディッディは、私たちがまだソルゴノに住んでいて、修道女の幼稚園に通って

たころのテレジーナにとってもよく似ているようです」、とディッディのなかに妹テレジーナを見ていた⁷⁾。

ピエーロ君につづけてアレッサンドラさんが、「ディッディがその辺を歩いているのをたまに見ましたよ。この家に何度も来ました。しかし、彼女はもう82歳で、ここのところ病気が悪化して入院しています。ディッディはこれまで、グラムシの家を維持するのに大変協力してくれました」と語ってくれた。

グラムシの家ではグラムシの家系図を作っていて、その場で見せてくれたが、家系図作成にもディッディは熱心だったということだ。家系図は後日、メールに添付して送ってもらったが、これは不十分なものだとわがざるをえなかった。たとえば、アントニオ・グラムシ・ジュニアの名前が、家系図のどこにも見当たらない。アントニオ・グラムシ・ジュニアは、グラムシの二男・ジュリアーノの息子である。亡くなったとは聞いていない。家系図には父ジュリアーノの名前はあるが、息子ジュニアの名はない。また、テレジーナの子ども四人の配偶者や子どもの有無もわからない。家系図はディッディの代で途切れていた。

さらにわたしは、ギラルツァの住民は現在グラムシのことをどう思っているのか、二人に尋ねてみた。二人はこれも難しい質問だといいながら、ギラルツァ人のピエーロ君がまず、「ギラルツァの住民の大多数は、グラムシに関心をもっていないか、無視しています。地元の人はこの家には来ません」とため息交りに答えてくれた。それに対してアレッサンドラさんが、「ベルリンの壁崩壊以降、共産主義や社会主義に対する一面的な見方が広がってしまって、グラムシに対するこの町の住人の見方も変わって

きました」と補足した。

この点に関しても、わたしには思い当たる節があった。わたしはグラムシの家の斜め向かいの民宿に三泊したが、主人はわたしの滞在の目的を告げても何の関心も示さなかった。彼の家族も同じだった。三泊中、主人も家族の人も、グラムシについてひとことも触れなかった。他の住民と話しても、同様の反応だった。

ピエーロ君とアレッサンドラさんによると、1975年、ギラルツァに革新自治体が誕生した（1980年まで）。ユーロ Kommunismus の盟主・イタリア共産党が健在だったころの話だ。革新自治体が、幹線道路を“グラムシ大通り”と名づけようとした。それにキリスト教民主党的勢力が反対して、この話は結局流れたようだ。ピエーロ君は「イタリアのほとんどの都市や町にはグラムシ通りがあるでしょう。グラムシの故郷ギラルツァにないのはおかしいでしょう」と眉を顰めてみせた。そして、「郷土人グラムシに鼓舞されて新しい動きを起こそうとする人はいるはないが、ごく少数です」とアレッサンドラさんがため息をついた。わたしが“ギラルツァの人は保守的なのもかもしれませんね”という、ピエーロ君が「あくまでも偏見ですが」と前置きをして、「ギラルツァの人は、他の町の人にケチ (avaro) だといわれています」と冗談をいった。

二度目のギラルツァ訪問ではピエーロ君が、グラムシのなかのサルデーニャの痕跡とでもいうべきものを生き生きと語ってくれた。彼の説明からわたしは、グラムシの生涯や思想の一端を、以前よりも具体的にイメージできるようになった。三度目の訪問のときは、ギラルツァとグラムシに関する素朴な疑問を、ギラルツァ人ピエーロ君にぶつけることができた。また、ア

レッサンドラさんも加わってくれて、地元の人しか知りえないような貴重な情報を得ることができた。インタビューの途中で二人がグラムシのことを“ニーノ”と愛称で呼びはじめたので、グラムシが今でも、ギラルツァの町のどこかで生きているような気がしてきた。

6. アーレスのグラムシの生家

話が戻ってしまうが、わたしは二度目のサルデーニャ訪問の際アーレスに向かった。アーレスは人口2,000人ほど。これといった産業のない、山間の田舎町だ。オリスターノの町の中心にあるバスセンターから、中距離バスに乗って一時間ほどで着く。

先にも述べたが、二度目のサルデーニャ訪問のとき、シロッコが吹いた。わたしがアーレスに着いたのは、シロッコが吹きだしてから2、3日後であるが、一向に治まる気配がなかった。雨に濡れながらとりあえず“グラムシ広場”に行ってみた。広場の前には庇のついた小さなバス停があり、雨宿りができた。広場はほぼ三角形で、一辺が十数メートルある。二、三のオブジェが据えられているが、どれも1メートルほどの高さである。イタリアの有名な現代彫刻家ジオ・ポモドーロ (Giò Pomodoro) の作品だそうだ。

立体の一つは灰色っぽいピラミッドで、“ZENITH” (頂点) と刻まれている。もう一つのオブジェは白色で、棒状のものが振り合わされており、二つの手で何かを持ちあげているような恰好になっている。台座の一方には、設置された年であろうか“1977”と、他方には“A・GRAMSCI”と彫ってある。率直にいったわたしは、アーレスのグラムシ広場に関心をもてな



アーレスのグラムシ広場



グラムシの生家

かった。それぞれの立体がどのようなコンセプトの下にあのように配置されているのか理解できなかったし、抽象的なオブジェにも興味を覚えなかった。

雨宿りに飽きたわたしは、次にグラムシの“生家”に向かった。グラムシ広場から歩いて10分ほどである。アーレスの生家もギラルツァの家と同様に、町の目抜き通りに面している。グラムシの生家は決して豪華というわけではないが、やはり“立派”だった。大きさはギラル

ツァの家の母屋と同じくらいである。壁は最近塗りなおされたのか、きれいなクリーム色をしていた。内部が公開されていないかと少し期待したが、閉まっていた。生家の入り口の上には、それがグラムシの生家であることを示す石板が据え付けられていた。内部が見えないか覗いてみたが、二重窓になっているのか、内部を窺い知ることはできなかった。窓の一つにグラムシのイラストが描いてあるポスターが貼られていて、詩の朗読会やコンサート等、生家を使ったイベントが行われていることがわかった。

三度目のグラムシの家博物館訪問の際、わたしはピエーロ君に、前回のギラルツァ訪問の後にアーレスに行った話をし、生家のなかには何があるのか、見るべきものがないのか聞いてみた。すると、ギラルツァの家とアーレスの生家とは連絡を取り合っていないのか、彼はよくわからないと答えた。そして、生家は長い間“パール”として使用されていた

ので、グラムシに継わるものはないのではないかと、というようなことをいった。さらに、ギラルツァの家はグラムシ家の所有物だったが、アーレスの家は借家だったと、“借家”を強調した。

たしかにグラムシはアーレスで生まれたかもしれないが、この地に1894年までしか居なかった。グラムシ一家はアーレスを後にし、ソルゴノに移った。アーレスの生家は一家が転出した後、長い間人手に渡っていたのなら、見るべきものは残っていないのかもしれない。

7. 州都カリヤリへ

カリヤリはサルデーニャの州都である。公式人口は16万人程度であるが、隣接地域の人口を吸収しつづけており、実人口は40万とも50万ともいわれる。サルデーニャの他の町とは違って、カリヤリには都会的な雰囲気が漂っている。地下鉄が整備されつつあるし、国立の総合大学もある。街の目抜き通りには、有名ブランドショップやレストランが軒を連ねており、港に近いローマ大通りではオープン式のカフェが多数営業している。この大通りには、D・H・ロレンスのお気に入りだったという“カフェ・ローマ”もある。

カリヤリは1908年から1911年まで、グラムシが高校生活を送った町である。彼はギラルツァの小学校を卒業した後、人より二年遅れてサントゥ・ルッスルジュ中学に入学する。サントゥ・ルッスルジュは、ギラルツァから十数キロのところに位置する町だ。先に触れなかったが、わたしはグラムシの家でピエーロ君に、グラムシが卒業したギラルツァの小学校とサントゥ・ルッスルジュの中学校が、今でもあるのかどうか聞いてみた。彼は、「ギラルツァに小学校はあるが、グラムシの頃とは教育制度も学校の名前も変わってしまった。校舎も当時とは別のところにある。今ある小学校はまったく別のものだ」といった。サントゥ・ルッスルジュにある中学校も同様だということだった。

ギラルツァの小学校も、サントゥ・ルッスルジュの中学もなくなったが、カリヤリのデットーリ高校は、新旧ともにまだ存在している。かつて使われていたと思われる古い校舎は、町の真ん中のデットーリ通りにある。そして新制デ



旧デットーリ高校校舎

ットーリ高校は、町の外れに存在する。

はじめてデットーリ高校の旧校舎らしきものを見つけたとき、その前でタバコを吸っていた20歳代前半と思しき男性に、これがデットーリ高校の建物かどうか聞いてみた。若者は、その通りだ、これはかつてのデットーリ高校の校舎だと答えた。校舎は通りに面した一棟で、外壁は褪せたピンクのような色をしていた。建物内部に入って壁や使用されている木材を見ると、この建物が古いものであることがわかった。さらにわたしは、この建物の中が“美術高校”なのかも聞いてみた。『グラムシへの旅』のなかで嶋田氏が、デットーリ高校らしき建物は、戦後できた美術高校だと書いていたからだ。若者は、カルチャースクール、あるいは市民大学のようなものだといった。念のためわたしは、近くにいる中年紳士に同じ質問を試してみた。彼によれば、この建物は昔、たしかにデットーリ高

校の校舎だった。だが今は、教会付属の“修道院”（convento）である。美術高校などではない。紳士は横の教会を指さしながら、教えてくれた。

グラムシは高校時代、旧デットーリ高校のすぐ近くに兄ジェンナーロと下宿していた。そしてその後、少し離れたカルミネ広場付近に引っ越した。キャリア時代の生活はかなり厳しいものだったらしく、グラムシは後に苦々しい思いで振り返っている。

1910年から1912年にかけて私にどういうことが起こったかだけでも思い出してください。1910年には、ナンナーロ [=ジェンナーロ] がキャリアで働いていたので、私も兄のところへ行って一緒に暮した。そこで初めて月給をもらったが、その後はぜんぜんもらえなかった。だから、ナンナーロにすっかり養ってもらっていたが、その兄の収入が月に100リラは越えなかった。二人は下宿を変えた。私が住み着いたのは、湿気のため漆喰がすっかり落ちてしまい、中庭というよりは井戸か便所のようなところに面した小窓が一つついたきりの小部屋だった。しかし私は、ナンナーロがいつも不機嫌で、私をとがめるので、いつまでもこうしてはいられないことに突然気づいた。そこで、朝のわずかなコーヒーを飲むのをやめ、それから昼食の時間をだんだん遅らせていって、それで夕食を節約するようにした。こうして、約8ヵ月間、一日に一食しか食事をしない日が続き、高校の三年目の終りには、ひどく重い栄養失調にかかった⁸⁾。

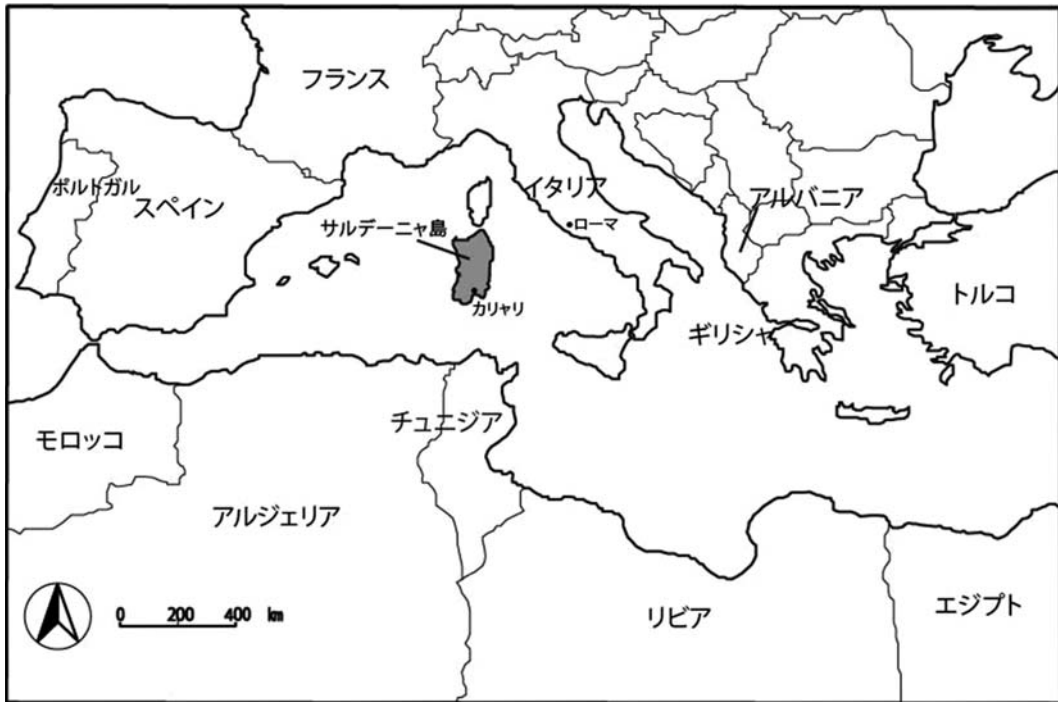
旧デットーリ高校の校舎を写真に収めたわたしは、次に、移転した高校を見に郊外へ歩いて行った。新制デットーリ高校はクジーア通り

（Via Cugia）にあった。校舎はコンクリートの巨大な建物で、わたしは最初、それを大学の校舎と勘違いした。学校の入り口付近に張り付けられてあった古いパネルから、デットーリ高校がこの地に移ってきたのが1949年だということがわかった。わたしは広い校地を一周してみた。高校前にあるピザ屋の入口に、タバコを吸っている年配男性が立っていた。わたしは、この学校はグラムシが卒業した高校かと聞いてみた。老人はその通りだといいながら、グラムシについて詳しく語ってくれた。わたしがデットーリ通りの旧校舎も見てきたと話すと、老人は、あの校舎は第二次大戦中、ファシストの事務所として使われていたと教えてくれた。

単なるわたしの印象にすぎないが、サルデーニャでは、若者たちはグラムシの名前こそ知っているが、彼の生涯や思想にあまり関心を持ってはいないように感じた。それに対して年配の人々は、グラムシについて聞くと、熱心に語ってくれた。そして、グラムシをファシズムと関連づけて語りたがった。ファシズム時代を生きたイタリア人にとってグラムシは、マルクス主義者としてよりも、ファシズムに斃れた闘士として記憶されているのかもしれない。

8. サルデーニャ・多文化主義の島

1911年、グラムシはアッバザンタ駅から汽車に乗って旅立ち、船でティレニア海を渡った。彼はデットーリ高校を卒業し、トリノー大学で奨学金を受けながら言語学を専攻することになった。グラムシはなぜ哲学や政治学ではなく、言語学を専門にしたのだろうか。わたしはこの点に関して、かねてから疑問を抱いていた。嶋田豊氏は『グラムシへの旅』のなかで、グラム



サルデーニャ島及び地中海周辺諸国

シが言語学を専攻するようになった理由について、以下のように想像を巡らせている。

壮大な眺めだった。市街を展望し、カリアリ〔カリヤリ〕湾に停泊している船の彼方にひろがる水平線を見つめているうちに、船が水平線をこえてイタリア本土へ、そして、世界へ波をけて進むような想いがしてくる。私は確信した。高校生グラムシも何度かこの展望台から水平線を見つめていたことがあるにちがいない。貧しさのために友人たちとのつきあいも控えめだった若い日のグラムシは、多分、一人でここへ歩いてきたのだろう。

そういう姿を想像していると、グラムシがやがてトリノ大学の文学部の学生になったとき、はじめ言語学を専攻した思いがわかるような気がした。彼はサルデーニャの言語と文化を愛しながら、

ヨーロッパのなかのイタリアの未来を考えようとしていたのだ⁹⁾。

ある日、わたしもグラムシが訪れたであろう展望台に登ってみた。展望台からカリヤリ湾の大パノラマを見はるかすと、嶋田氏のいう通り、想いは地平線を超えて広がっていくかのようだ。たしかにグラムシも高台から市街地と海を見下ろし、地平線の彼方に想いを馳せたことがあるだろう。だがしかし、カリヤリの展望台から見える海の方角には、アフリカ大陸がある。ヨーロッパではない。またそれだけではなく、サルデーニャのほぼ最南端にあるカリヤリからは、イタリア本土・ローマよりもアフリカ北岸・チュニジアの方がずっと近いのだ。

嶋田氏が想像を巡らせている事柄があくまでも比喩だということは、わたしも弁えているつ

もりだ。わたしがいいたいのは、「サルデーニャの言語と文化」それ自体が、そしてサルデーニャ島そのものが、多様な言語や文化によって根底から染め上げられているということである。そしてそれは内陸の田舎町ギラルツァでも同じだということだ。

わたしも実際にギラルツァを訪れるまで、きわめて閉鎖的な町を想像していた。鉄道もギラルツァを避けるかのように、隣町のアッパザンタを通っている。だが、実際に現地を訪れてみて感じたことがある。ギラルツァは実は、サルデーニャ島の交通の要衝なのではないかということである。グラムシの家は町の中心を貫いている道路に面しているが、この道の車の交通量はきわめて少ない。しばらく大の字になって寝そべることができそうなくらいである。時たま通るのは、狭い町内を移動するノロノロ運転の車ぐらいだ。しかし、ときおり、車が数台まとまって猛スピードで駆け抜けていく。上から下へ、そして下から上へと。ギラルツァは、一見閉じているように見えて、この地域の交通の要衝なのではないか。漠然とではあるが、それが一回目のギラルツァ訪問でわたしが感じたことだった。

わたしはギラルツァで、わたしが抱いた印象をどう思うか、ピエーロ君とアレクサンドラさんに聞いてみた。二人とも、まさにその通りだと賛成してくれた。ピエーロ君は、「あなたがいうように、ギラルツァは外に開かれた町です。そして、この地域だけではなくて、サルデーニャの交通の要の位置を占めています。地理的に見ても中心なのです。北から南へ、南から北へ。西から東へ、東から西へ。地図を見れば、ギラルツァがサルデーニャの真ん中にあることがわかるでしょう」と熱く語ってくれた。

そういえばギラルツァの町には、どこもなく宿場町の雰囲気が漂っている。わたしはピエーロ君の説明に得心がいった。さらに彼は、「サルデーニャは地中海の中心に位置していて、スペイン、フランス、ギリシャ、トルコやアフリカの文化や言語の影響を受けてきました。サルデーニャには昔からアルバニア系移民も多く、アフリカからの黒人移民もたくさんいます。さまざまな言語・文化がせめぎ合う場所に、ギラルツァがあるともいえます。グラムシもアルバニア系移民の末裔ですよ」と念を押した。

グラムシが大学で言語学を専攻したのは、文化的雑種性および多言語性からなるサルデーニャ島の文化的個性をより深く理解したいという想いからではなかっただろうか。周辺地域のさまざまな言語から影響を受けてきた開放的な言語・サルデーニャ語。同時に土着性が強く自らの思考の地平を根底から画しているサルデーニャ語。言語学専攻はグラムシにとって、自らの世界観省察の意味をもっていたのではないかとわたしは考える¹⁰⁾。

また、グラムシの眼差しはすでにギラルツァ時代から、世界に向けられていたのではなかったか。彼はギラルツァ時代に、トリーノにいる兄ジェンナーロを通じて世界の労働運動や国際的な社会主義運動に関する雑誌や新聞を手に入れ、熱心に読んでいた¹¹⁾。グラムシはキャリアの展望台で「ヨーロッパのなかのイタリアの未来」について考えただろうが、同時に彼は、ヨーロッパから従属を強いられ、“歴史”から疎外されたアフリカの民衆やアラブ世界にも思いを馳せたのではないだろうか¹²⁾。

おわりに

わたしはギラルツァの「グラムシの家博物館」で、ガイドのピエーロ君とアレッサンドラさんから、サルデーニャの文化や地理、ギラルツァの風土や歴史、グラムシの生涯や思想について、詳しい話を聞くことができた。彼らと出会えたことは、わたしにとって幸運だった。また、三度のサルデーニャ訪問を、このような形で報告できたことにもわたしは満足している。しかし、叶わなかったこともいくつかある。

まず、グラムシ『獄中ノート』の“復刻版”を入手できなかったことだ。『獄中ノート』の復刻版は「サルデーニャ連合」から出ている、グラムシの直筆ノートをそのままフォトコピーして本にしたものだ。そういった意味で、“復刻版”は目下、もっとも信頼性のある『獄中ノート』だということになる。わたしはキャリアにある「サルデーニャ連合」の本社まで行って交渉したが、“エディーコラ（新聞・雑誌販売所）へ行け”の一点張りだった。わたしは“十店以上のエディーコラに行って聞いてみた。でも、売っていなかったのだ”と訴えたが、取り合ってくれなかった。

次に、ソルゴノを訪れることができなかったことだ。ソルゴノは、グラムシ一家が1894年にアーレスを去り、1898年にギラルツァに転入するまで在住した町だ。わたしとしてはやはり見たい場所である。ソルゴノはギラルツァからそれほど遠くないので、次回はぜひ訪れたい。

わたしはグラムシの生涯や思想のなかにサルデーニャ島の文化的個性や歴史的痕跡を見ようと、島内のグラムシ所縁の地を訪ねた。現地を

巡ってみてわたしは、サルデーニャ島の文化的個性や地政学的背景が彼の思想形成に大きな影響を与えたことは間違いないと確信した。だが、それと同時に、サルデーニャ島でさまざまな人と意見を交わし、現地で考えを深めていけばいくほど、サルデーニャの文化的個性とは何なのか、わからなくなっていった。そして、グラムシのなかに“サルデーニャ的なもの”あるいは“イタリア的なもの”を求めれば求めるほど、“非サルデーニャ的なもの”および“非イタリア的なもの”が浮かび上がってきた。

スペイン・カタルーニャ語やフランス・コルシカ語の影響、ギリシャやアルバニアからの移民、チュニジアやソマリア等アフリカ諸国や黒人移民の存在、リビアやエジプト等の政変……。そもそも、自ら「半分しかサルデーニャ人ではない」というグラムシを、“サルデーニャ”という枠のなかに押し込んで理解しようというわたしの考え自体に無理があったのではないか。いや、もっと正確にいわねばならないだろう。サルデーニャの文化的・歴史的個性とは、“国民国家イタリア”を前提とした枠組みはもちろんのこと、“サルデーニャ的なもの”対“非サルデーニャ的なもの”といった二項対立的な境界線そのものを無化するものではないだろうか¹³⁾。雑多なものをつねに併呑しながら自らを豊饒化し、既存の枠組みをたえず異化しつづける。もしグラムシの思想のなかにサルデーニャの文化的・歴史的痕跡を読みとることができるのであれば、この点を描いて他にないだろう。

注

- 1) サルデーニャ島の人口は165万人、面積は24,000平方メートルである。州都はキャリア。

面積は四国（18,800平方メートル）よりも大きい。言い方をかえると、四国の面積はサルデーニャ島の約四分の三の大きさということになる。サルデーニャ州のかつての主な産業は農業・牧畜だったが、現在は観光・サービス業、IT産業の発展に力を入れている。

- 2) 嶋田豊氏は1929年生まれ1997年没の哲学者。日本福祉大学で哲学を講じた。マルクスやフォイエルバッハを研究し、『実践的唯物論』の提唱者の一人であった。また、映画やアニメ等、大衆文化についても造詣が深かった。同氏は生活から切り離された哲学、政治的現実と向き合おうとしない日本の哲学を批判しつづけた。日本のなかでは早い時期からグラムシの思想に注目していた哲学者の一人である。『嶋田豊著作集』全三巻が、萌文社から出版されている。
- 3) グラムシ『愛よ知よ永遠なれ』第4巻、13頁（1932年11月14日、タチアーナ宛て）。グラムシ『獄中からの手紙』の訳文は、基本的に『愛よ知よ永遠なれ』（大久保昭男・坂井信義訳）に従ったが、変えたところもある。その際、次のものを底本にした。Lettere dal carcere (Einaudi, 1965), A cura di Sergio Caprioglio e Elsa Fubini.
- 4) フィオーリ『グラムシの生涯』（430頁）。
- 5) グラムシの父チチッロはソルゴノ時代、「大金横領、収賄、文書偽造の容疑」（フィオーリ）で逮捕された。その後、母ベッピーナは一人で7人の子どもを育てなくてはならなくなった。フィオーリは、その時点からグラムシ家の「屈辱と極貧」の時代が始まったと書いている。グラムシの中学入学が人より二年遅れたのも、そのためである（『グラムシの生涯』37頁）。
- 6) サルデーニャ島からグラムシのような革命的な思想家が生まれた理由としては、サルデーニャの土地所有制度、それから大衆と知識人の関係を挙げなくてはならないだろう。グラムシは「南部問題についての覚え書」（1926年）のなかで、サルデーニャの社会運動がラディカルなのは、サルデーニャでは他と比べて大土地所有者層が薄い点、そして大衆と知識人とのダイナミズムが存在している点を指摘している。グラム

シのこの分析は、グラムシ自身にも当てはまるだろう。

しばしば「南部問題」という呼び名で一括して扱われることが多いが、グラムシはサルデーニャ島、シチリア島、そして本土イタリアの南部を区別し、土地所有制度や近代産業の発展、大衆と知識人との関係等を相関させながら、慎重に議論を展開している。わたしは今後、サルデーニャ島を中心としながら、『獄中ノート』における「南部問題」の継承・発展に関しても検討を進めていきたい。

- 7) グラムシ『愛よ知よ永遠なれ』第3巻、195-196頁（1932年8月22日、タチアーナ宛て）。
- 8) グラムシ『愛よ知よ永遠なれ』第1巻、139頁（1927年9月12日、カルロ宛て）。
- 9) 嶋田豊『グラムシへの旅』175頁。
- 10) グラムシは後に、『獄中ノート』のなかのもっとも重要な箇所の一つで、次のように記している。

「あらゆる言語はひとつの世界観またはひとつの文化の要素をふくんでいるというのが真実であるとすれば、しかしまた、各人の言語からその世界観がどの程度複合的なものであるのかを判断することができるというのも真実である。方言しか話さない人、あるいは国語の地方的変異態しか理解できない人は、必然的に、世界史を支配している偉大な思想潮流とくらべて多少とも狭く限定された地方的な世界直観、石化した時代錯誤的な世界直観をわかちもっている」（『現代の君主』41頁）。

また、グラムシは兄弟に対して「地方的・サルデーニャ的環境に押しつぶされないようにする必要」をたえず説いている（グラムシ『愛よ知よ永遠なれ』第1巻、139頁。1927年9月12日、カルロ宛て）。彼が言語学を専攻したのは、狭隘な「地方的・サルデーニャ的環境」を克服し、自らの世界観を「世界史を支配している偉大な思想潮流」の水準にまで高めるためではなかったか。

- 11) フィオーリは『グラムシの生涯』のなかで、次のようにいっている。

「父親のフランチェスコ・グラムシは、息子

〔アントニオ〕がなにか過激な出版物を手しているのを見つけて、ぎょっとしてがみがみどなりつけるのであった。そうした新聞やパンフレット類はトリノーから送られてきたものだった。ジェンナーロは、ギラルツァの登記所で、先進地域からやって来た青年技師たちといっしょに働いていたときから、すでに新思想に共鳴を感じていたのだが、今やかれはイタリアでもっとも赤い町トリノーで、兵役についていた。〔中略〕アントニオの読書熱は年とともに高まっていったので、土曜の夕方家に帰ってくるとすぐに、ジェンナーロから送られてきた新聞やパンフレットに読みふけるのであった」(60頁)。

そのころグラムシは、サントウ・ルッスルジュの中学生だった。サントウ・ルッスルジュに下宿していたグラムシは、週末ギラルツァの実家に帰ってきて、トリノーから送られてきた新聞やパンフレットをむさぼり読んだのだろう。

- 12) グラムシは『獄中からの手紙』のなかで、ウェルズの『世界史概説』を批評しながら、以下のように述べている。

「これ〔H・G・ウェルズ『世界史概観』〕は、歴史というもの、とくに古代においては、ヨーロッパにしか存在しなかったと考える根深い慣習を打破しようとしていて、興味深い本です。ウェルズは、ヨーロッパ史について語るときと同じ口調で、中国、インドの古代史やモンゴル族の中世史について語っています。世界的観点から見て、ヨーロッパは世界文明全体の受託者であると自負しうる地域ではもはやありえないことを、彼は明らかにしています」(『愛よ知よ永遠なれ』第3巻, 42-43頁, 1931年9月28日, カルロ宛て)。

高校生のグラムシがすでに西洋中心主義的観点から脱却し、「世界的観点」に立っていたのかどうか、彼の青年期の手紙を分析しなくてはならないだろう。現在、国定版・『書簡集』の出版が進められている。青年期の書簡分析はまたの機会にしたい。

- 13) 河島英昭氏は「すでにポルト・トッレスの港に降りたときから感じてはいたが、サルデ

ーニャの人々は行きずりの他国の人間に特別な関心を示さない。いや、彼らはまったくの無関心である、と言ってもよい」と記している(『イタリアをめぐる旅想』197頁)。

確かに氏のいうとおりだ。「まったくの無関心である」という表現は誇張ではない。私もサルデーニャ島では、どこから来たのか、何人か、などと聞かれた覚えがない。移民が多くを占めるサルデーニャ人はグラムシと同様、自分たちを「半分しかサルデーニャ人ではない」と思っているのではないか。逆にいうと、サルデーニャに居る人のことを、「半分は」サルデーニャ人と考えているのではないか。

* 本稿に掲載されている“サルデーニャ島地域概観図”そして“サルデーニャ島及び地中海諸国の地図”は、立命館大学文学部人文学部地理学専攻・三回生の松尾眞吾君が作成してくれた。この場を借りて謝意を表したい。

** 本稿に掲載されている写真はすべて筆者・尾場瀬一郎の撮影によるものである。

参考文献

- アントニオ・グラムシ『新編 現代の君主』(上村忠男訳, 2008年, 筑摩書房)。
 アントニオ・グラムシ『愛よ知よ永遠なれ』(大久保昭男・坂井信義訳, 1982年, 全4巻, 大月書房)。
 アントニオ・グラムシ「南部問題についての覚え書」『知識人と権力』(上村忠男訳, 2003年, みすず書房)所収。
 ジウゼッペ・フィオーリ『グラムシの生涯』(藤沢道郎訳, 1978年, 平凡社)。
 アウレリオ・レプレ『囚われ人アントニオ・グラムシ』(小原耕一・森川辰文訳, 2000年, 青土社)。
 エリック・ホブズボーム『匪賊の社会史』(船山榮一訳, 2011年, 筑摩書房)。
 河島英昭『イタリアをめぐる旅想』(1994年, 平凡社)。
 嶋田豊『グラムシへの旅』(1980年, 大月書店)。
 陣内秀信『南イタリアへ!』(1999年, 講談社現代新書)。

陣内秀信・柳瀬有志『地中海の聖なる島サルデーニャ』（2004年，山川出版社）。

Mimma Paulesu Quercioli, *Le donne di Casa*

Gramsci [ミンマ・パウレス・クエルチオリ『グラムシ家の女たち』], Editori Riuniti, 1991。

Survey

A Short Report on “the House Museum of Antonio Gramsci”

OBASE Ichiro *

Abstract: The aim of this paper is to report on “The House Museum of Antonio Gramsci” in Sardinia. Gramsci was born in 1891 in Sardinia, and lived there until 1911. I think that the life and thought of Gramsci would have been deeply influenced by Sardinian culture and history. I visited Sardinia three times to examine the relationship between Gramsci’s open thinking and Sardinian cultural backgrounds. I tried to interview two guides working in “the House Museum of Antonio Gramsci” on this point. According to the guides, the island of Sardinia is located at the center of the Mediterranean Sea, and the Sardinian population is composed of many immigrants, so the island is cross-cultural and very open. Gramsci would have been influenced by the openness and hybridity of this island.

Keywords: Antonio Gramsci, the House Museum of Gramsci, Italia, Sardinia, Ghilarza

*Part-time Lecturer in Ritsumeikan University